

3度目のアイラ島へ（その3）佐伯 順弘（岐阜県）

Travel planning 2017

DAY5 19th AUG ILY★今回の記録DAY6 20th AUG ILY

DAY5 (19AUG2017) ILY

0600 起床。スコットランドらしい曇り空。天候の確認をしたり、窓を開けて真冬のように冷たい空気を深呼吸したりして、このアイラ島を楽しみつつ、身支度を整える。と同時に今日の行動予定について、もう一度検討する。

DAY3ではアイラ島に到着して、最初に向かったのが、バスが通っていない上に遠いキルホーマン蒸留所 (Kilchoman)。同じ方面にあるブルイックラディ蒸留所 (Bruichladdich) をパスして攻略。翌日 DAY4 には、交通の便が悪いブナハーブン蒸留所 (Bunnahabhain) に達した。このような攻略作戦を立てたのはアイラ島にある蒸留所の分散状況に原因がある。大きく分けて4方面に分散して配置されていることが最大の原因である。滞在するホテルがあるボウモアの街から西の方面にブルイックラディ蒸留所があり、そこに到達する途中から枝分かれするように作られている道の終点がキルホーマン蒸留所である。キルホーマンまではバスが通っていないため、半日にこの1つしか予定を組めなかったのである。そして、DAY4には、ボウモアの街から北東方面のやや遠方に存在するブナハーブン、カリラを攻略目標に決めた。バス停も近くにないにも関わらず、DAY3でのタクシー使用による多大な出費に懲りて、昔から街道を歩き通して鍛えた足を使うことにした。その結果、カリラ蒸留所 (Caol Ila) をパスしてブナハーブンのみを攻略することになった。途中、アードナホー蒸留所の建設現場を遠目に見物するという偶然にも出会うことができ、それはそれで素晴らしい作戦となった。

本日、DAY5はボウモアから南東方面に3つ集まっているアードベック (Ardbeg)、ラガブーリン (Lagavulin)、ラフロイグ (Laphroaig) の各蒸留所の攻略作戦を実施することにした。

0800 レストランではいつものスコティッシュブレックファストをいただく。



毎回同じような朝食であるにも関わらず、全く飽きることはない。そもそも食事に飽きることなどあるのだろうか。「毎回同じものでは飽きる。」などという言葉が聞かれることがあるが、それはいったいどういうことなのだろうか。栄養が偏らないようにすることは大切だが、その点が解決されているならば、毎回同じであっても特に問題はないのではないか。この朝食について分析してみても、動物性蛋白質、植物性蛋白質の他、脂質、糖質も十分取れている。食物繊維についても全粒粉のパンの他に数点の食材から摂取できる。ビタミン類も焼きトマト、オレンジジュースなどから摂取することができ、特に不都合はない。ミネラル分については血を使ったソーセージもあり、ある程度充足されていると考えられる。なんとといっても血液は非常に栄養価が高く、(通常的人类ではないが。)吸血鬼などそれだけで生きていくくらいだ。そのようなことを考えている内に食べ終わってしまった。

飲み物はセルフサービスなので、最後にコーヒーを取りに行く。コーヒーサーバーで保温されていて、最終的には香りのない苦い泥水になるはずのものだ。しかし、レストラン一番乗りなので、まだおいしいタイミングのものをいただけ。ありがたいことである。朝食を無事摂り終え、部屋に戻る。

0840 わずかな荷物を持って、ホテルを出発する。基本的に行動する時にはできるだけ物を持た

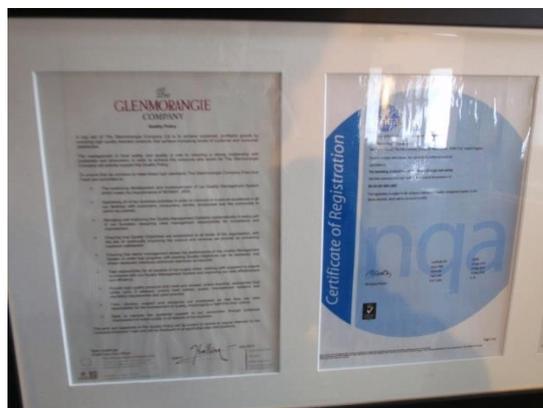
ないようにする。コンパクトに収納できるナップサックには地図、水、ミニタオルくらいしか入れない。サックを失ってもいいように、現金、カードは身につけておく。もちろん、掏られるような大きな財布などではなく、コンパクトなものでポケットからはみ出したり、滑り出したりしないようなものである。観光地には一定数のスリがいることを心にとめておく。これが基本だが、国によって若干変えていく。アメリカではカード主流の国なのに必ず現金を持つと言われた。カツアゲにあった時に渡すものないと最悪撃たれるらしい。中国旅行の時はわざとくしゃくしゃにした紙幣をポケットにそのまま入れていた。郷に入っては郷に従えというわけだ。こういうことも犯罪被害を未然に防ぐ小技の1つであると同時に、その土地の人に溶け込む方法でもあると考えている。0843バスにのる。身軽なのでバス停まですぐだったのだが、なんとバス到着が完璧なタイミングだったのでロスタイムなしで乗れた。本日の目的地まではバスが通っているので、安心だ。アードベック蒸留所までの運賃は2.95GBP。



0916 約30分でアードベック蒸留所に到着。蒸留所の正門辺りに停留所がある。この蒸留所のためのバス停なのだろう。ビジターセンターらしき場所に入り、すぐツアーの申し込みをする。ツアー開始は10時。1時間半のツアーで5drams付き。料金は20GBP。(もう確認の必要もないが、一応確認しておく。Dramとは揮発性半導体メモリ「Dynamic Random Access Memory」のことではなく、スコットランドで、ウイスキーの一杯分を指すものである。何mLといった細かい規定はなく、酒場、時代により、変化する。最近では、25mL、または35mLをワン・ドラムとして提供する酒場が多いらしい。)



ツアー開始まで時間があるので周辺を探索する。すると、意外な発見が。アードベックはアイラモルトらしいスモーキーな味わいなのだが、女性にも人気のあるグレンモーレンジィのキーモルトであるとの説明を発見した。つたない英語力での翻訳なので大きな間違いを含んでいるかもしれないが、そのように解釈できる解説に出会うことができた。この力強いアイラモルトがああグレンモーレンジィの味わいを生み出しているかと思うと、自分ではまだまだ到達できないウイスキーの奥深さを感じた。



1005 ツアー開始。ツアーには、ロシア系だと思われる男性グループがいて、楽しげに参加していた。ツアーガイドが20代前半と思われるかわいい系の女性だったからに違いない。ツアーの邪魔にならない程度の騒ぎ方なので、特に問題はないが、何かにつけてガイドにちょっかいをかけていた。ツアーガイドも慣れているのだろう。それらのちょっかいに対する対応がまさに神対応といった感じで、ツアーの楽しさを全く壊すものではなかった。若いがこれぞプロという姿勢に感心させられた。

ツアーの内容については、ウイスキーづくりの基本は知っているので、95%以上は理解できて

いると思う。ところどころ不明な部分もあったが、全体的には問題なしである。ツアーは1時間ほどで終わり、次はテイastingである。



天井が低く、まるで秘密基地のようなテイastingルームで、腰かけながら説明するガイドがカッコよかった。説明を聞いているときは先ほどのロシアグループも真剣な表情で聞いていたが、ウィスキーを味わっているときには指でハートマークなんか作ったりして、ふざけた盛り上がりがあった楽しかった。

1200 ツアー終了。楽しいツアーであった。1杯の量が多かった上に5杯飲んだので、175ml程度のウィスキーを摂取と思われる。このくらいの酒ではどうということはない。気分よくツアーを終え、ショップで何か記念になるものを探していたら、味わいのある簡素なバッグを見つけた。レジに持って行くと、「これは買ったものを入れるためのバッグだから無料であげる。」と言われ、ありがたきいただいた。ウィスキーの1本でも買いたい気分になったが、日本まで割らずに持って行く自信が全くなかったので、申し訳ないが多くの感謝の言葉を述べて、いただいた。

1205 ここアードベックからラガブーリン、ラフロイグと一本道沿いに蒸留所があるのだが、そこには国道に沿うようにして、「3つの蒸留所小道」(Three Distilleries Path)と名付けられた遊歩道がある。バスで行った方が楽だが、時間的にはそれほどかわらないし、何とんでもこの小道を歩かない手はないだろうと思い、あるくことにした。長距離歩行には慣れている。



標識にはラガブーリン蒸留所まで1mとあるが、もちろん1メートルなわけがない、マイルである。1 mile ⇔ 1609.34mだから、1500m程度なら走っても10分くらいだろうが、酒を入れて走ればどうなるかくらいは分かるので止めておいた。そうでなくても昔、あきらめの悪さだけを武器にマラソンや自転車の耐久レースに出たせいで膝を歩行不能になる直前まで破壊してしまった。過去の栄光に頼るのは愚かだ。おとなしくだらだら歩いていくことにした。

夏なのだが、厚い雲に覆われた空、そしてその間から漏れる強い光、UKの絵画によく描かれるような風景がそこにはあった。そして、数々の花々が咲く。UKを構成する地域の花は、イングランドがバラ、ウェールズがスイセン、アイルランドがクローバー、そしてスコットランドの花は「アザミ」である。だから、スコッチウィスキーの瓶にはアザミがデザインされているものがある。理科教師の習性からか、動植物の観察、地形の観察と考察、小道に転がる岩石の同定などをしつつのんびりと散歩を楽しんだ。日本なら残暑が厳しい時期だが、全く暑くないどころか、時々寒い。冷たい雨が降ることもある。雨はすぐ止み、海沿いなのでそれほど湿気も多くないので快適

である。老後に移住するなら、台湾の高雄、フランスのニース、スコットランドのアイラだろうと考えている。



1224 それでも20分くらいでラガブルーリン蒸留所に到着。ラガブルーリンはブレンデッドウィスキーのキーモルトとしてもシングルモルトとしてもおいしいと思うのだが、到着したときはほとんど観光客がいなかった。受付にも人がおらず、声をかけると奥から人が出てきたので、聞いてみると今日はツアーをやっていないとのこと。以前も来たことがあるのだが、まるで美術館のような落ち着いた雰囲気施設の施設内だ。入り口から奥に入って左側にラウンジがあり、暖炉やソファがある。絵画や書籍もあり、落ち着ける空間だ。こういうところに来るとつくづく日本の室内は明るすぎると思う。適度な暗さが落ち着くというのが理解できないのだろうか。絵画を眺めていると、先ほど対応してくれた係員が、「どうぞ。」といった感じで1杯渡してくれた。こういうのが何か粋なんだなあ。ラガブルーリン、スコットランド、ここの係員のそういったものの懐の深さというか、真の意味のおもてなしの心というものを感じてしまった。金もらって対価としての「おもてなし」じゃないんだよと、期待されているからもてなすんじゃないよと、もてなしますなんて大きな声言うもんじゃないんだよと、そんな宣伝されまくっている日本のおもてなしの野暮ったさが身に染

みた。そりゃ、日本でも本来のおもてなしはまだ生き残っているだろうけど、宣伝されまくって、それを前面に出しまくってすっかり価値が無くなった感じがある。それで何か特別なことをされないと文句を言う風潮が情けない。もてなされる側にも品格が必要なのだよとお知らせするのも大切なのではないか、その国の文化へのリスペクト云々ではなく、その人の品格が、その人の佇まいが重要なのだよと伝えるにはどうすればよいのだろうか。ま、そんなことをしなければならぬような野暮な奴とは今後も付き合うつもりはないので、関係ないのだが。



ソファに座り、ラガブルーリンを味わう。これは16年だなどと勝手に思いながら、かなり真剣に1杯と向き合った。

1313 記念品を2.99GBPで購入し、ラガブルーリンを後にする。ラガブルーリンからラフロイグまでは少し時間がかかった。距離があるだけではなく、6杯のウィスキーでやや酔いが回ったのかもしれない。

1332 それでも20分くらいでラフロイグ蒸留所に到着した。「ただいま。」という感じでラフロイグ蒸留所の門を入った。ラフロイグ蒸留所に土地を所有しているので、「ただいま」なのである。そんな思いを胸に、ビジターセンターの扉を押し

(旅はつづく。)